

子どもの志向・意向とその導き方

室 谷 幸 吉

子どもたちは、それぞれ子どもなりに、日日自分の人生を精いっぱい生きようとしているし、事実そのように生きているのだと私は信じた。自分の人生を精いっぱい生きようという心の据え方を、「よりよく生きようとしている」といいかえてもかまわない。

私は子どものお母さんに「△ちゃん、たのもしいいお子さんです。この子になら何でも安心して頼むことができる。どんなことでも安心して任せられる」と、しばしばほめることがある。大ぜいの子どもを扱っていると、その子どものなかには、教師の目から見て、不安なく物の任せられる子・信頼のできる子どもと、その反対にどこかガタピシしていて頼りなく、安んじて物は頼めないという不安定な子どもがいるのに気づく。この子にあれを頼んだら、これをさせたら、またしくじるのではないか——そ

んなふうに信用のおけない子は、まずいにきまっている。

「このガラスの汚れをふいてとっというてね」そしてガラスをふかせると、ガラスを割ってしまったり、ガラス面をいっそう汚してしまふ子がある。

「バケツに水をくんできてね」と頼むと、くんではくるが、歩いた道にポタポタ水をこぼしつつづけ、床を水だらけにして平気な子ども……とまあ例をあげていけばきりが無い。

どうしてこのように仕事について、あるいは学習について、信用のできない子どもが生じてくるのであろうか。

このような子どもたちに共通して認められるひとつのことは、生き方——つまり生活に対する心構えというものが、総じてナマヌルク・オロソカな点である。

自分の歩いていく前方に、これという視点の設定や目標のない

場合、その歩みは力がなく、散漫でムダが多いものとなり、無意味な一歩一歩がくりかえされる。前進目標が大であれ小であれ、とにかくはつきりしていれば、それに向かつての歩みは一歩一歩力のこもったものになる。力強いこの一歩は、ことばをかえれば、現状をふり切り、新しい世界・領域へ超越・超入することである。現状を、絶えず古いカラとして後方におしやる働き——これこそすばらしい克服であり、願わしく有意義な抵抗なのである。このように現状を、次なる新しい現状に押しあげ引きあげていく状態を、私たちは『成長』と呼んだり、『充実』と名づけてりしているのである。

期待や願望は、人間の生活とその行動に活力を与える。それは人間をはつらつとさせるエネルギーの源である。期待や願望、それは「志」である。「志」はエネルギーであり、そのエネルギーは人間の生活の明るさを保証するものである。

子どもを生き生きした人間・たのもしい子どもにしたいならば、その子に人間らしい「志」をもたせようではないか、子どもの体全体に、なみなみと「志」をはぐくみ、「志」を豊かに培ってやろうではないか。

子どもが日々を生きている。その生き方のなかに、目標がもちつづけられているかどうかを、私たちは問題としなければならぬのではないか。目標があいまいだったり、それをもっていない

子どもには、子ども自身が目標を育てるように、あるいは助言し、あるいは介添えの手をのばそう。また目標の弱い子どもであるならば、それを強化し、確信のもてるような導きを時を逸せず加えてやろう。それから更に、子どものいづく目標そのものの質を検討し、少しでも質のよい、高い文化的な目標をもたせるように、子どもの目を、心を、つまり意識を高めさせるように工夫しよう。

——今、あなたは、何を考えていますか。どんなことを思っていますか。そのことを話してちょうだい。

子どもにこう話しかけ、子ども自身に、自分の行動の内側・心の内側をのぞかせることを私はしばしば行なう。こういう問いかけや話し合いは、子どもらに、その時々自分の心をはつきりさせ、自分の心の居すまいを整えさせるに有効なようである。

子どもらのある時点における心の中の姿勢——意識や理想は、当然のことに多様である。その多様さのなかに、私たちは、子どもの個性や心性のちがいや特徴をありとうかがい知ることができるのである。

二月八日（満六歳児）と六月十六日（満七歳児）との二つの時点でキャッチした、子どもの内面志向の姿の特徴的なものの例を表にしてみた。このような心の姿の追跡を、このままで終わらせず、この後もある期間において、キャッチし、この表に順次つけ

	① 2月8日	② 6月16日
並木稔枝	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ユキト君がながい間休んでいきょう出てきたのでよかったです。(人・友) ▶ きょう学校からかえって、よく勉強ができればいいと思った。(学習) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 早く大きくなって、ハカセになりたいな。(願望) ▶ 早く海に行きたいな。(行動) ▶ アメリカに行きたいな。(行動) ▶ 勉強を早く、いっぱいしたいな。(学習) ▶ 早くいろいろなことを知りたいな。(願望・能動知)
西のり子	<ul style="list-style-type: none"> ▶ どこかにいきたいなあ。(遊) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ わたしはいまあそびたい。(遊) ▶ いま、犬とあそびたい。(遊) ▶ 勉強もしてみたい。(学習)
鈴木智子	<ul style="list-style-type: none"> ▶ アイスクリュームたべたいなあ。(食) ▶ きょうのケーキおいしかったなあ。(食) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このごろ学校におくれる。(時間) ▶ 早く夏になんないかなあ。(季節)
宮川武士	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 早く家にかえりたいなあ。(遊) ▶ 早くおべんとうたべたいなあ。(食) ▶ 早くパンの券を買いたいなあ。(行動) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 自動車をかいたい。(願望・物) ▶ 早くオルガンをじょうずになりたい。(学習) ▶ 字が上手になりたい。(学習) ▶ 絵が上手になりたい。(学習) ▶ もう一回みたくに行きたい。(行動・遠足)
井川浩一	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 小松君が休んでさびしいな。(友) ▶ 早く家にかえりたいなあ。(遊) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 早く未来になればいいな。(願望) ▶ また夏休みに九州に行きたいなあ。(行動・遊) ▶ 家に犬がいればいいなあ。(動物)
海老沢良子	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 手のり文鳥がどうしているかな。(動物) ▶ アイスクリュームたべたいなあ。(食) ▶ あそびたいな。(遊) ▶ いちごをたべたいなあ。(食) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 朝、車にのってから、あした、たん生会をやるので、たん生日の時のあそびを何にしようと思っていた。でもいい思いつきは出なかった(遊・社会) ▶ 朝、車にのって、私は、チョコちゃんどうろでまってるかなと思った。(友)
白石はじめ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 早く大きくなりたい。(願望・成長) ▶ 早くあたらしいかん字が出てこないかなあ。(学習) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 人間が空をとべたらいいなあ。(願望) ▶ みんなが早く絵をかけばいいなあ。(学習) ▶ 世界を一周してまわりたい。(行動) ▶ 早く9月になればいいな。(季節) ▶ 早くカケ算やワリ算をならいたいな。(学習) ▶ 早く夏休みや冬休みがこないかな。(季節) ▶ 早くおとなになりたいな。(願望)

加えていくとよい。そうすると、その子どもなりの、時日経過に則した意向・志向の姿容状態をつかむことができる。そしてその変化の状態や動向から、その子どもへの心意活動の特徴や傾向を見出すことができる。子どもの意識がどんなに生き生きしているか、つまり生活の仕方や学習の活力の状態を判定することもできるのである。

仮に今、表にあげた稔枝・のり子・智子を比べても、子どもたちの頭の中の働きの活発さや知的積極性の優劣のようすが、ありありと見分けられるだろう。それぞれの知的・意的・情的な全体像が、つまり、学習者ないしは生活者としての総合的なバイオリテーターの全体像が、イメージとなって立ちあらわれてくる思いがするのである。

—どの子を、どういう方向に育てていく必要があるか。

—そのためにはどのような刺激過程を準備し、組み立て、与えていくべきであるか。

およそ、そのような学習指導の方針と具体的方策を、これらの観察は指導者に示唆しているように思われる。

それと同時にもう一方では、現時点において、その子どもは、学習対象をどの程度に消化したりするか、要することにがらを理解し受けとめていく能力の限界みたいなものについても、有力なメドを与えてくれる。そういうことについての貴重なよりどころとなるものである。

このような観点によって、子どもの内部状況を打診すること、私たちは子どもの「人間らしさ」を把握することができる。子どもという人間を、意欲とか創造性という、人間の「生きる根源」に肉迫した地点からつかみあげ、洗い出すことができる。このことは、教授Ⅱ学習の、よって以て立つ地盤として欠かし得ない重要なことだからなのである。

二月から六月までは、期間経過が四か月なのであるが、この割合短い期間にも、子どもの意思の世界の変動は、なかなか顕著であるように思われた。子どものみことな内部充実や発達の足どりに、目を驚かされる例がいくつもあった。その反面、それほど前向き変容や発達のうかがえない、知的にも意的にも活性の弱

い(低い)子も、また目立った。

そこで、総体的な印象をまとめれば、

1. 時間的関心が急速に高まってきている。そのことが、時間や季節にかかわる願望や期待として打ち出されている。

▼このごろ学校の休み(時間)がたくさんあったらいいなあと思っています。それから、パパの会社の休みもあったらいいと思う。(マズミ)

▼わたしのピアノの時間は二時間だ。ママは、「二時間をじょうずにつかいわけなさい」という。わたしはいやだなと思う。でもピアノはやめたくない。(元子)

▼きょう学校にいくとき、わたしはともしんばいだった。バスにおくれるかな。おくれたらどうしようと思った。(珠代)

▼きょう、六時間じゃなく四時間ぐらいたといと思う。(ミマ子)

▼朝おきてテレビをみている時、きょうは体育(朝会体操のこと)があるからいそいでいかなければと思った。だっておくるといやだから。(きよし)

といった具合にである。「時間を気にする」くらし方が強まってきたのは、意識が社会性や合理性をおびてきたしるしと見てまちがいはない。

2. 時間にかかわりの深いことだが、子どもながらに、「人間

の「一生」とか、人生といったものについて心を向ける、その巨視的姿勢などは、四か月以前には、ニオイさえ嗅ぎ出し得ないものであった。

▼人間とか、いきものっていやだな。だっていきているときはいいけど、おばあさんになったら弱くなって、病気で死んだりするから、人間はいやだなと思っている。(サナエ)
注目すべき発達の方向である。

3. 空間的な意識や認識の確立と拡大とがありありと感じられる。社会的なことがらへの志向・関心としてそれが立ちあらわれ、社会的なこと。また全般に意欲的な姿勢が強まり、意思が多面的・行動的になってきたことをあげることができる。

このことは、次のような現象の中に指摘することができるだろう。

子どもの志向傾向は二月の時には、第一に遊び・第二に食べ物に大きかった。それが六月では「遊び」の方は、ほかのことがらとほとんど同じ水準に肩を並べ、「食べ物」は最も少ない志向に落ち込んでしまった。代わってグンと伸びて来ているのは、

▼電車の中で、先生にあげる手紙のことばかり考えていた。

▼学校について、先生への手紙をかってポストにだした時、先生が見てくれるかなと思った。(イズミ)

▼朝、行きにパパがタクシーをつかまえた。わたしはタクシー

にのって考えていた。そしたらパパが、うたのふしを口ぶえてふいた。わたしは、「しずかにして」といって、パパのおでこをポンとおした。わたしは、「考えているの」といった。パパが、「ピアノのことでしょ」といった。わたしはガイコツのこと(車の運転席に下げたあるマスケットのこと)を考えていたんだ。(元子)

▼バスの中で思った——八まん前というバスでいこのころで、へんなこくがはってあるな、と思った。(破れてグチャグチャになっていて、何の広告だかわからないので……ということだ)(俊記)

▼きょう学校にいくとき、バスが通る道を通らないでパパの車できた。その時ぼくはエッソのガソリンスタンドに出ると思ったら、ぎんこうのところにてた。ぼくは、へんなのって思った。ぼくは車がとまった時、タクメーターを見たら一〇〇〇かいてんだから、大きい音がでるんだなと思った。(康宏)

といったふうなものである。これらを通して感じられるまばゆいばかりの変容・発達には、教えられる多くのものがあつた。

★

人間における「生活」とは何なのか。

それをさまざまな大欲求・小欲求——別なことばであらわせば、生活への諸期待・計画的志向・前方意図と呼ばれる多様な意

欲の無限追求である、と解することもできよう。そして、この色とりどりの欲求——すぐ目先に置いた欲求、あるいはかなり遠い将来に達成を予想する欲求など——の実現を追い求めていく熱意や強烈さを、「生きるバイタリティー」と見る事ができる。こうした見方を子どもらの生活にかぶせてみよう。

するとそこに、それぞれの子ども達の生活力——活性の強さや、弱さ・生活する態度や姿勢のまともさやゆがみなどが、割合はつきりと浮き上がってくる。

無気力で怠惰な子どもをよく見かける。何となくじじむさく、生き生きしない子もいる。そういう子どもは、不健康な体の持ち主であるかもしれないが、より多くの原因は、自分の生活に期待や願望をもたない、というところにあるように思われる。

大なり小なりの計画——見込みを自分の生活にもつことが、生き方に緊張や活気・はりをもたらすのである。

物を見る。つまり、ある物・対象を意識する、というのは、外在する物の側にある働きではなくて、目玉の持ち主である、つまり見手である人間の心の側にあることである。人間の心の据え方・構え方に意識を保証する要素がふくまれているのだ。

目を開けていながら、（つまり外界のアレコレの事象を眼球に映しているながら）何も見てはいない、という子どもがいるものだ。物の輪郭が崩れに崩れて、つかみようない混沌、またたと

えば濃い乳色の霧の中をさまよっているような、茫漠とどらえようのない、うるんだ視覚の世界に住んでいる子どもがいる。

そういう子どもたちが、「私は、何も思っていない」「考えてることなんて何もないよ」とよくいう。

生活に核をつくり出していく意志のない子どもたちである。生活の仕方がノベタラで、出たとこ勝負で、焦点もなければ結節もないのである。

「みみずみたいにのたくっているだけなんだね」と、私はそのような生き方を評するのだが、みみずだって、実は、何ほどの目標があつてのたくっているのであつて、全く意味のないムダなのたくりをくり返しているのではないだろう。

私たちは、明日に飛躍するクッションをもたない活性の乏しい子どもたちに、まず以て『何を・どのように目に映すか』という身近で手近な視覚の方法から教えてかからねばならない。

外在事物の目への写し方・写したものの読みとり方——このような初歩から、ことをわけ、手をつくして導かないかぎり、そういう子ども達の混沌を抜け出させることはできないだろうと私には思われる。

なんとかして、少しでも早く、すべての子どもを、生き生きした生活のビジョンの持ち主であるようにしたいものである。

（明星学園）